



News from TNU

■■■ 三重大学での留学生生活 ■■■

天津師範大学 DD 正式1期生 齊子晗

2015年3月に天津師範大学 DD4期生(正式1期生)が帰国しました。二人に三重大学での1年間の留学生生活を振り返ってもらいました。

光陰矢のごとし。あっという間に日本での一年間は過ぎてしまいました。三重大学の先生方のおかげで、充実な留学生活ができました。今回の留学は私

にとって初めての海外での一人暮らしですが、不安な気持ちがありながらもいろいろな挑戦ができて成長もしたと思います。

最初の留学生活はとてワクワクでしたが、時間の経つにつれて授業内容がだんだん難しく感じ、ストレスもたまってきました。幸いに分からないところがあると云ったら、先生と日本人の学生たちはいつも簡単な日本語に変えて分かりやすく説明してくれます。また、チューターもいるので、彼らは日本語の指導だけではなく、日本文化についての話しもいろいろと教えてくれました。本当に勉強になりました。このように、日本人と日常的な交流を通して、なかなか中国では勉強できない日本語、体験できない日本文化と触れる機会がたくさんできました。

専門授業に関しては、専門用語がたくさんあるので、私たち外国人にとって一層難しく感じます。また、日本で卒業論文を完成させることになっていきますので、短期間でテーマを決め、研究するのがとても苦労しました。私の指導の先生は休みの日でも、専門知識を教えてください、卒業論文のことを詳しく指導してくださいました。外国人のため、書いた日本語の文章は通じないところはたくさんあると思いますが、先生が専門的な問題だけではなく、日本語の問題もできるだけ分かりやすく説明してくださいました。先生のご指導のもとで、私は専門知識を勉強した一方、日本語能力もある程度で伸びました。先生に対して、とても感謝する気持ちを持っています。



留学生とのクリスマスパーティ

授業以外に、国際交流センターの催しているいろいろな活動やイベントによって、日本の伝統的なイベントに参加することもできました。たくさんの国から日本に集まった留学生たちと楽しく日本文化を体験しているうちに、彼らとの交流も多くなりました。私たち留学生はともに目指している日本語の上達に励みながら、お互いに触れあい、他国の文化も理解できますし、様々な形の国際交流を展開することができました。日本語能力が上達に伴って、日本文化に対する理解もだんだん深くなってきました。

今までたくさんの方々のおかげで、私たちは楽しく一年間の留学生活を送ることができました。特に日本に来たばかりの頃には、先生方や先輩たちはいろいろ手伝ってくださって、本当に心から感謝しております。これからみなさんのご期待に応え、学んだ知識を中国で活用してみたいと思います。また、日本で感じたことや体験した日本文化もぜひ中国の友達と話し、日中の架け橋になろうと志しています。

■■■ また会いましょう、三重大学 ■■■

天津師範大学 DD 正式1期生 李錦

天気はだんだん暖かくなります。私達の留学生活もう終わりになっています。去年の桜が満開する四月に私達は初めて三重大学にきました。光陰矢の如し。あっという間に一年が過ぎ



餃子パーティー

て、別れの時はもう来ました。本当にさようならと言いたくないです。また会いましょう。三重大学。

この一年の留学生活の中で私が特に印象深いと思っていることはたくさんあります。例えばゼミの中で行われているいろいろな活動です。

私のゼミはこの一年で二回見学旅行に行きました。一回目は京都の醍醐寺に行って、二回目は滋賀県の大津市に行きました。初めて日本の大学で勉強する私にとって、これはとてもいい経験だと思います。まず中国では「ゼミ」がないです。それから、ゼミ旅行のような先生方と同級生たちとの一緒に活動も非常に珍しいです。だから、こういうような活動が私にとって、結構目新しく楽しかったです。ゼミ旅行以外に、餃子パーティーなどのゼミの仲間達の中で行われる中国人の学生と日本人の学生と一緒に料理を作って食べる活動もたくさんあります。これらの活動を通して私達と日本人の学生達との交流が促進されて、

友情も深まっていた。本当楽しかったです。

また、私達は三重大学の先生方と学生達にぜひ自分の謝意を述べたいです。留学生の初心者としての私達は、特に日本に行った最初のころ勉強から生活までよくいろいろな困難にぶつかっていました。先生方と周りの日本人の学生達のご指導のおかげで、私達はそれらの問題を克服して、そしてどんどん日本での生活に慣れてきました。授業をする時、先生方はよく私達に何か分かりにくい内容があるのか、私の話しのスピードはよろしいかといったようなことを聞いていました。これが本当に助かると思います。そして、私達は一人ごとにチューターを持っ

ています。チューターがいつも私達と沢山話して、特に私達の生活の面でいろいろと手伝ってくれました。本当にありがたいと思います。ここで、もう一度三重大学の先生方と学生達に誠にありがとうございましたと言わせていただきます。

この一年の記憶は本当に一ごとで言い切れません。この海辺の大学で、私達は人生の中の初めての留學生活を過ごしていました。この別れの時に、本当に万感こもこも到っています。でも、別れは再会の始です。未来のある日、きっと三重大学に再会すると信じています。

また会いましょう。三重大学。

天津 短期派遣 報告

天津出張報告－日本のものづくり教育の紹介－

技術・ものづくり教育講座 教授 松岡 守

天津には打ち合わせ等でこれまでも何回となく足を運んだことがあり、天津師範大学附属実験中学校でのロボット作りや知財教育にも関わったことがあります。天津師範大学での授業は今回が初めてとなります。一年後に三重大学に来る事となる2年生向けの「日本語・日本語文化」において、「日本のものづくり教育」をテーマに行いました。といったものごぎりやはんだごてを使っての授業を行うのは容易ではないので、紙を題材にしました。出張日程、授業内容は概略以下のとおりです。

3月

- 1日(日) 日本→中国移動
- 2日(月) 午前 川本先生、東先生の授業参観
午後 授業参観を踏まえて初回の授業の手直し
- 3日(火) 午後 自己紹介、正十二面体作り、なるべくゆっくり落ちる物体作り
- 4日(水) 午後 日本の学校、日本の教科書の紹介、夜は小正月のイベントを見に
- 5日(木) 午後 知財授業(紙を使った発明)
- 6日(金) 午後 折り紙建築、発明体験
- 7日(土) 午前 ペーパータワー作り、私の研究活動紹介
午後 授業全体の振り返り、試験
- 8日(日) 午前 成績付け
午後 観光(天津之眼という観覧車ほか)
- 9日(月) 中国→日本移動

正十二面体作りは、厚紙で6面ずつつながったものを折り目を付けて重ね、輪ゴムをかけて「3、2、1、0」の掛け声と共に手を離すと勝手に立体化するという手品っぽいもので、大うけでした。以後も午後2コマが基本、最終日は全日の集中講

義で、学生にとっては授業への集中が難しいように思いますが、折々にもものづくり、グループでの作業を取り入れることでしっかり授業についてきてくれました。写真は授業の様子、そして学生らの紙工作の作品の例です。



授業期間の前後に各一日余計に滞在しました。おかげで事前にも他の先生の授業を見させていただくことにより感覚を掴み、また事後には成績付けを時間をかけて行うことができました。また滞在期間中に小正月があり、爆竹が夜遅くまで鳴り響くという、中国らしい体験もでき、いい思い出となりました。

天津 DD プログラム

4月に徐先生とともに天津師範大学DD第5期生(正式2期生)が到着しました。

三重大学来学

外国人特任教員 徐川



東先生宅にて

4月は新入生の季節です。われわれ天津師範大学の学生20人(5期生)はこの春に三重大学に到着しました。三重大学校内であんなにきれいな満開の桜があることにみんなは驚きました。三重大学での一年間の勉強生活を充実させようとわくわくしながら思っていました。

4月8日に新入生の皆さんと一緒に入学式に参加させていただきました。応援団の演ずることや、部活の募集など、5期生にとってはじめて経験するものでした。私は若い学生たちを見て、毛沢東の詩の『沁園春・長沙』には「恰同学少年、風華正

茂」と言う句を思い出した。まさに同窓の少年少女で、風采も文才も真っ盛りという意味です。今の留学に来た中国人学生だけではなく、新入生の全員にぴったり当てはまるでしょう。

そして、教育学部と国際交流センターの先生がたが生活と学習の面において親切に指導して下さったおかげで、5期生は早々に日本でのキャンパスライフに慣れました。語学の勉強は言葉の勉強ならまず文化を理解しなければなりません。学生たちは日本で生活して、日本人学生と一緒に授業を受けて思想を交流して、日本人の先生がたとコミュニケーションしていくうちに、

必ずより深く日本文化を理解できるようになると信じております。21世紀に入ると一番重要視すべきなのは人材育成であると認識されています。5期生は教育学部に編入され、それぞれの指導先生のもとで勉強したり、研修活動に参加したりして、一年後、その語学力は大いに上がることを期待しております。同時に、交流を通じて三重大学学生の中国理解にも貢献できると思います。

私は三重大学と天津師範大学の先生がたの国際交流と教育への強い関心と情熱で作られたこのDDプロジェクトがこれからも花開き、今留学に来ている5期生は将来中日友のかけ橋になることと活躍する姿を大変期待しております。

海外 研修参加 報告

第10回天津師範大学語学・文化研修に参加して

教育学部社会科教育コース4年(64期) 伊藤達哉

3月9日から15日間、教育学部の学部生12名、院生1名の計13名が天津師範大学への研修に参加させていただきました。私自身は中国の文化や人々にふれることで自分の世界を広げることができたという思いでこの研修に臨みました。また、私は将来教師になった時に、子どもにいろいろな経験を教えることができる教師になりたいと考えているので、この研修で大学だけではできない生の経験を積みたいと考え、参加しました。

日本とは大きく違った街や人、環境に初めは戸惑い、不安に



も感じましたが、天津師範大学の皆さんの温かさにふれ、13名の学生みんなで協力し合いながら、非常に楽しく、充実した15日間を過ごすことができました。瞬間に15日間は過ぎていきましたが、授業で習う言葉が街で活かされ、相手の思いを受け取り、こちらも伝えようとする事で思いが通じ合えた時の喜びは今でも忘れられません。

この研修を通して多くのことを学ぶことができました。私自身、今まで日本を出たことがなかったので、中国の建物や景色など、目に入るものすべてが日本とは違って、すごく刺激的でした。そして、世界は広いということを実際に体験して学ぶことができました。また、食事や衛生環境の面から、改めて日本の素晴らしさも考えることができました。

この研修に参加して、多くの貴重な経験と素晴らしい仲間たちに出会うことができ、本当に良かったです。私自身、中国のことが好きになったし、またこの天津に来たいと思うようになりました。

この貴重な経験を生かして、将来教師になった時に、子どもたちに中国での自分の経験を伝えて、生きた知識を通して、中国の良さを教えたいと考えようになりました。

短い期間でしたが、濃密な時間をありがとうございました。

外国人 教師着任 挨拶

2015年4月にこれまでのPiccolo先生にかわり、J. W. Roberts先生が着任されました。

The Experience of Language

教育学部外国人教師 John Wolfgang Roberts

I came to Mie University this year, to join the English Department, within the Faculty of Education. What is different about this position, from my previous positions in Toyohashi and Tokyo, is that my students are future English teachers. Within three years or so, most of my current students will have students of their own, and will therefore be active contributors towards a more international Japan. In the short time I've been teaching here, I've had many rewarding experiences teaching motivated, educationally minded students. Another consequence of my unique position at Mie University is that it's caused me to reflect upon my previous teaching experiences related to primary and secondary education.

My teaching experience in Japan is varied. I have taught at nearly every level in different capacities. I have been an ALT in elementary and junior high schools. I have also taught my own



junior high and high school English classes as the primary language teacher. The differences in student output between

ALT classes and conversation courses have been noticeable, and this is what I want to talk about here. The differences in student output did not occur because one system is better than the other, nor because of the different nature of my involvement within the classes. After much reflection, I've come to believe that the difference was because adequate speaking opportunities were less common in classes focusing mostly on grammar.

On the subject of classroom dynamics, the big difference from the ALT class and the weekly conversation class was the amount of time students spent speaking. ALT classes can be fun and culturally enriching, but in the school district I taught at, meeting students once or twice a month was not enough to increase speaking opportunities and foster confidence. The weekly conversation classes I taught as a primary language teacher, however, provided ample opportunities to speak, and most importantly, to make *mistakes*. I wouldn't say my lessons were any better than in the other system. No, the primary difference was that students were required to speak, and could not just hide away at the back of the class! Making mistakes while trying to produce the language is an important part of learning, and perhaps the best way to contextualize difficult elements of the target language. However, often what I found as an ALT, was a student tendency toward reticence and perfectionism. If there is one word of advice that I would wish

to give, and which I hope future language teachers would pass on, is that mistakes are perfectly fine, normal, and nurturing to the learning experience. In addition, I would encourage supplementing your normal lessons with many speaking activities, regardless if the ALT is there.

Of course, as future junior high and high school teachers, there are responsibilities to get through the textbook, cover required grammar, and prepare students for future entrance exams. However, this, in my opinion, is not enough if we are to encourage confident speakers (mistakes and all). Though grammar may have stricter rules, spoken language is creative and ever changing. There is so much more to communication than just grammar, but also body language, confidence, and our best usage of our target language. There comes a point where the textbook is a *hindrance* to real experience.

English is always evolving and never static. What is correct English now, might not have been before, and may not be so in the future. I believe it is important to understand the creative *process* of languages: not as static, but as fluid. Not to be mastered, but to be experimented with. In closing, I would like to offer a thought experiment to all our future teachers: what cultural significance might it make if we approached our classrooms not as institutions imparting *knowledge*, but as language laboratories encouraging meaningful experimentation and *exploration*?

学生
海外留学
報告

The Great Vancouver Life

教育学部英語教育コース4年（63期）野田ひかる

私は昨年の5月から約10ヶ月間バンクーバーへ留学していました。私は学校で英語を習い始めたときから、ALTの先生と話すことがとても好きでした。自分が勉強した英語を使って話してみると、全く違う国、文化を持つ人であっても、英語を通して分かり合えるということに魅力を感じていたからです。大学でさらに英語に触れる機会が増え、海外留学する友達も多く、海外で1年間過ごしていた先輩たちの話も聞き、「自分も海外で英語に囲まれた生活を送ってみたい!」と思いました。これが留学を決意した理由です。

私はまずESLの学校に通ったあと、TESOLというコースを取りました。簡単に言うと、母語が英語でない子どもたちに英語を教える技術を学ぶコースです。私は将来、小学校で英語を教えることを目標にしているので、留学を決めたときにこのコースを取ることを決めていました。講義を受けて、授業案の作成、教材の準備、プレゼンの準備と、もちろんすべて英語なのでとても大変でした。私はそのあとESLの学校で教育実習もさせてもらいました。クラスには5歳~12歳のいろんな国の子どもたちがいて、発達レベルも英語のレベルも全然違う子どもたちを同時に教えるにはどうしたらいいのかかわからず、とても苦労しました。しかし私たちを繋ぐものは英語しかないのです、どうにかかわってもらおうと必死で取り組みました。たった4週間でしたが、毎日かわいい子どもたちに囲まれてとても楽しかったです。

学校を卒業した後は、日本食レストランでのバイトと、そろばんの先生をかけもちしながら、ボランティアをしていました。ある高校で日本語クラスのアシスタントをさせてもらえることになり、改めて日本語の難しさと英語でコミュニケーションを



とる楽しさを実感しました。私が学校を去るその日には、生徒たち全員が「上げば尊し」をうたってくれました。あの歌声は今になってもしっかりと耳に残っています。

たくさんのものに触れ、たくさんの人に出会い、たくさんの初めてを経験し、とても盛りだくさんな10か月でした。ここには書ききれないほどの思い出がたくさんたくさんありました。留学に行って、自分が少しだけ頼もしくなったような気もしています。たくさん得た分、たくさんのものを犠牲にした10か月でしたが、後悔はしていません。留学に行かせてくれた両親に、バンクーバーでお世話になった人たちに、応援してくれた周りの人たちにとても感謝しています。これからはこの経験が少しでも、誰かの役に立てるように頑張っていきたいです。